

共同研究【若手】●「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生（2012-2014）

本研究は、インドネシア語で「Pahlawan Nasional」^{パハラワン ナショナル}と認定された人たちが、そしてそれを支える制度、およびそれを取り巻く社会を対象としている。「Pahlawan」とは「英雄」に相当する語であり、前掲の2語で「ナショナル・ヒーロー」を意味する。この研究会では差し当たり「国家英雄」と訳しているが、1959年以來150名を超える人物が死後この称号を国から与えられ、今も毎年数名ずつ新たに認定されている。

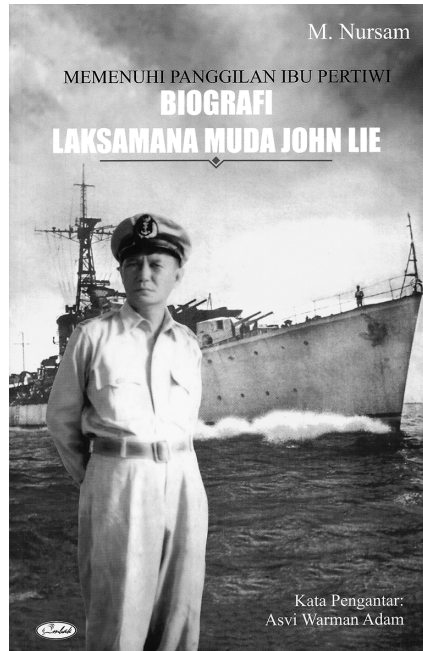
英雄というものを考える際、それが誰にとっての英雄なのか^誰が重要になる。インドネシアの国家英雄に関する限りこの問いへの直接的な答えは、「インドネシアン・ネーション」ということになる。それは制度理念に照らした説明としては正しいし、認定を受けた英雄たちも公的には、まさに国家・国民・民族を代表するものとして語られている。しかし、これまでの英雄のラインナップを概観すると、「多様性の中の統一」を国是とするこの国内部の「多様性」のバランスに配慮して認定がなされていることが分かる。また英雄が認定されるまでの個々の具体的な過程を吟味すると、ある歴史上の人物を英雄へ推戴しようとする当該の地域やエスニック・グループ、宗教、各種組織などの声を担うとされる当事者の思惑が複雑に絡み合っていることも見えてくる。

本稿では、2009年に国家英雄認定を受けたジョン・リー（John Lie/Jahja Daniel Dharma）の例を基に、表題の問い「誰にとっての英雄か」を出発点にして浮かび上がってくる現実を、幾段か掘り下げてみたい。

ジョン・リー——華人系初の国家英雄？

1911年、現在の北スラウェシ州マナド市に生まれたジョン・リーは、その名からも窺えるように、李姓の父（母は黄姓）を持ち、それゆえ出自からすればいわゆる「華人」ということになる。独立戦争期に彼は、オランダが海上封鎖するマラッカ海峡をスピードボートを駆使して幾度も横断し、共和国側に物資を供給（オランダ側からすれば密輸）した。その後も海軍将校として数々の軍事作戦に参加し、66年の退役時には少将に昇格していた。こうした功績から、彼には生前から多くの勲章が贈られ、88年に没するとジャカルタの国立英雄墓地に埋葬された。

さて、そんなジョン・リーに再び注目が集まるのは2000年代に入ってからであった。1965年の血なまぐさい政変（九・三〇事件）後に権力を掌握したスハルトが98年に大統領の座を辞し、以来インドネシアでは民主化や地方分権化が叫ばれ



国家英雄への推戴にあたりナビル財団が出版したジョン・リーの伝記本の表紙。

るようになった。一般にスハルト政権下で華人系住民は、国内の治安上の観点から、また後には開発のために経済力を動員したいとの思惑から、一貫して二級市民的扱いを受け続け、公的な場においてその存在は不可視化されてきたが、体制転換後は徐々に、華人としての主張が社会的に許容されるようになった。華人であるジョン・リーを国家英雄に推す動きは、こうした背景から出てきたとって差し当たりは間違いない。

そのジョン・リーの国家英雄への推戴運動は、最終的にはナビル財団（ナビルはネーション・ビルディングの頭字語）という、インドネシア華裔総会（1999年設立の全国規模の華人団体）の初代会長が新設した団体が主導し、2009年には見事に目的を達成した。認定直後には、華人系初の国家英雄が誕生したとして、メディアでも比較的大きく報じられた。だがこの経緯を、「インドネシア華人

の熱望を糾合した華人団体が、華人であるジョン・リーを国家英雄にすることに成功した」物語として済ますことは、事態の一面しか捉えておらず、何よりもこうした理解は「華人」なるものを過度に自明なものとして本質化してしまう。

多様な当事者

実際には、ジョン・リーの国家英雄推戴プロセスには他にも多くの当事者が関わっていた。何よりも、非常に早い段階からこの人物に着目していたのは、非華人のある歴史家であった。



北スラウェシ州立博物館内の展示室。「北スラウェシ州ゆかりの英雄たち」と題された展示の中に、舟形帽を被ったジョン・リーの写真（右から2番目）も掲げられている（2013年8月18日、筆者撮影）。

その歴史家は近年、スハルト体制期に政治的に「歪められた」歴史の見直しを強く訴えており、とりわけ先述の九・三〇事件の被害者の声や、この地に根づいてきた華人の存在などを国史の中に積極的に位置づけ直し、他方で過度に神話化されてきたスハルトや軍部の活躍を批判的に再検証するよう、新聞などで発言を繰り返していた。その彼は、国史見直しという大きな課題の突破口のひとつとして、華人が歴史的にインドネシアの正統な一員であることを、国家英雄制度を利用してシンボリックに示そうと狙っていたのであった。ナビル財団は、このアイデアを国内の全華人系住民の地位向上に資するものと受け止め、当の歴史家を学術顧問に招いて推戴計画に着手したのである。

重要な当事者は他にもいた。ジョン・リーは海軍軍人として活躍したことから、この推戴プロセスには海軍も積極的に関与することになった。その海軍には、独立戦争期にゲリラ戦を展開した陸軍ほど顕著な武勇伝がなく、彼の顕彰は願ってもないことであった。この意味で彼には、陸軍軍人が多数を占める国家英雄の殿堂内での海軍の存在感を増す役割が期待された。

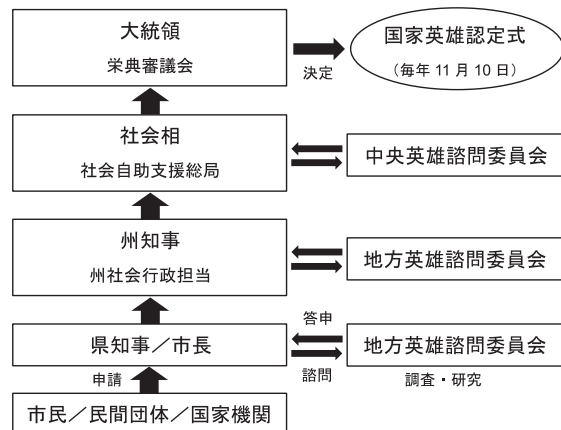
加えて、認定制度では、当局ゆかりの自治体からの推薦が求められ、認定が叶えばその人物はその地域と結びついた英雄とされる。ナビル財団は、ジョン・リーの出生地に基づいて、北スラウェシ州知事およびマナド市長の推薦書を得て彼を同地に帰属する人物として推戴した。その結果ジョン・リーは、形式的には北スラウェシ州民・マナド市民を代表することにもなった。

このように、ジョン・リーを国家英雄へと推戴するプロセスには、主要なものだけでもこれほど多彩な当事者が関わっていた。そして面白いことに、華人としての出自には生涯にわたり重きを置いたことはない遺稿に記していたジョン・リーが、「インドネシア華人の代表」として取り上げられた結果、ことさら「華人であること」が強調されたように、国家英雄候補として焦点化されてゆく過程で、彼には、それぞれの当事者集団の価値の担い手としての要素が事後に強調され、読み込まれていった。こうして見ると、「華人団体が、華人であるジョン・リーを国家英雄にすることに成功した」とする見立ては、事実の一面、あるいはひとつの焦点化された物語でしかないことが分かる。

全華人の熱望？

では、ジョン・リーの国家英雄認定を「インドネシア華人の熱望」の結果とする見立てについてはどうだろう。これもやはり、上で示唆した北スラウェシ州民・マナド市民としての語りがそうであったように、第一義的には制度上の見立てを後づけ的になぞった語り口として理解されねばなるまい。

確かに国家英雄の認定は、プロセス上、草の根からの申請を最終的に中央の審議会へと上げるボトムアップ式であり、また申請時には必要書類のひとつとして、英雄候補に関する市民・名士からの見解も添付されることになっている。そこで認定が実現すると、「国家英雄〇〇は、××（地方／民族／宗教／組織…）を代表する英雄である」といった具合に、「××の総意」として誕生した英雄が、他のナショナルな英雄と並び立つことにより、その「××」の存在自体をインドネシアン・ネーションの不可分の要素として定位する格好となる。先述の歴史家やナビル財団は、まさにこの制度とそれに伴う



国家英雄の認定プロセス（ただしジョン・リーが認定された2009年当時のもの。一部を省略した）。

公的表象のあり方を利用し、インドネシアン・ネーションの中に「華人」の存在を積極的に示すことを狙っていたわけだ。

ただし、かくしてシンボリックに持ち上げられた「華人」を、すぐさま現代インドネシア社会で（さまざまな意味で）華人として暮らしてきた諸個人と同一視してはならない。

当たり前だが、前者はあくまでも、ひとつの制度的文脈の中で語り直されたカテゴリーとしてのそれに過ぎない。無論、この国で最高位の栄典受章者一覧の中に華人系とされる人物が新たに加わったことで、これまで華人という理由で味わってきた個々の辛い経験が多少なりとも癒されたと感じる人や、あるいは自らが華人という集合体の一員であることを肯定的に捉え直す人もいることだろう。「インドネシア華人の熱望」、ないし「総意」という言説は、他ならぬこうした事態を遡及的に指した仮構である。しかし誰もが皆日常的に、「ジョン・リーによって代表されるインドネシアン・ネーションの一員としての華人」などといった大いなる想像の跳躍をしているわけではない。

国家英雄制度はそれ自体極めて象徴的な性質のものであり、実際は、すでに陳腐化するほど多数いる英雄に誰が認定されようとも、大多数の人には実生活上の重大事とはならない。だが、「華人系初の国家英雄」の実現を「インドネシア華人の熱望」の結果とする語り口を鵜呑みにしたり、あるいはその逆に、この国で華人とされる多くの人が無関心である（知らない）という事実に対して「意識の低い大衆の無関心」などと断罪してしまうことは、ともに「インドネシアで華人であること」の意味をナショナルなレベルでの表象の次元に矮小化して捉えているという点では、同じ過ちを犯してしまっている。

「誰にとっての英雄か」という問いの吟味は、こうしたことに気付かせてくれる。本研究では、この一見単純に思える問いからスタートしつつ、より研ぎ澄まされた眼でもって、制度的表象には還元され得ない現実世界の奥深くへとさらに分け入っていくつもりである。

つだ こうじ

東京大学大学院総合文化研究科准教授。専門は文化人類学・東南アジア地域研究。論文に「インドネシアにおける『中華の宗教』の現在——2000年代以降の体系化の動向を中心に」『華僑華人研究』9（2012年）など。著書に「華人性」の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから」（世界思想社2011年）など。